2009年度 修了

お産の知を紡ぐ
― 助産院で働く助産師の語りから ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
西堀　幸子

お産を取り巻く環境は、歴史とともに著しく変化してきた。元来産婆は、妊婦・産婦・褥婦の身体が発する変化を産婆自身の身体で感じケアを行ってきた。しかし、お産をする場所が、自宅から病院へ移行し、医療技術や医療機器がお産に介入した事で、医学側面が強調され、自然科学的思考の中でケアが行われるようになってきた。そんな中、助産院では、医学的知識を用いながらも、妊婦・産婦・褥婦の身体が発する変化を助産師自身の身体で感じケアを行っている。助産院では医療が行えないという限界があるがゆえの知恵を持ち、その知恵は実践を通して見いだされたものが多い。

本研究では、実践の中に編み込まれている助産院での知恵を探求するため、助産院で働く助産師にインタビューを行い、現象学の考え方を手がかりにして、助産師の経験の成り立ちを記述し、その記述を通して、助産師のものの見方・考え方がどのように生み出され、また、それがどのように実践の中へ編み込まれていくのか実践の仕方を探求し、助産師の経験の中に宿る“お産の知”を検討した。

インタビューを行った助産師の経験の中で、実践の仕方が象徴的に語られている内容に注目し、その注目した内容を四つのテーマにおいて記述した。一つ目のテーマは、「お腹の中の赤ちゃんと話す」であり、まだお腹の中にいる赤ちゃんの思いを感じて行うケアに関して記述した。二つ目のテーマは「うまく産まれる」であり、助産師が産ますのではなく、うまく産まれるといった妊婦や赤ちゃんの方に主体性をもたせたケアを、妊娠中からお産までの経過を通して記述した。三つ目のテーマは「お母さんの産む力と赤ちゃんの産まれる力」であり、お母さんの産む力と赤ちゃんの産まれる力を信じてお産を行っていることに関して記述した。四つ目のテーマは、「赤ちゃんが伝えてくれるもの・与えてくれるもの」であり、赤ちゃんの思いを感じ、赤ちゃんの状態を身体で感じながらケアを行った出来事に関して記述した。これらの記述を通して、「人や状況に促される」「身体で感じる」「将来を見る志向性」「経験から知が生まれる」「経験の中に編み込まれる医学知識」といった経験の中に宿るお産の知の特徴が導き出された。